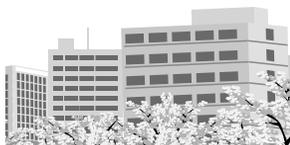


## 会員の広場



### ピバ・メヒコ―メキシコ紀行

濱田 義文（東京）

山々に抱かれた町、グアナフアト。赤や青、黄色の家々が山肌を寄り添うように積み重なり、陽光を浴びてまばゆく輝いている。標高2000以上の高原を風が吹き渡り、9月の光は透き通るように澄んでいる。迷路のような石畳の坂道を歩けば、スベイ

ン植民地時代の面影を残すコロニアル建築の合間から教会の鐘の音がこだまする。市場には陽気なドクロをモチーフにした民芸品や、色彩豊かな日用品が旅人の目を楽しませてくれる。夜、丘に登れば家々の灯が眼下に隣ぎ、星の海と静かに溶け合ってゆく。街角にはマリアッチの調べが流れ、マルガリータを片手にタコスを楽しめば、心がほどけていく。グアナフアトはかつて銀鉱で栄えた町である。大航海時代、地下深くから掘り出された銀がスペインの繁栄を支えた。坑道は今も地下に縦横に広がり、車道として利用されている。世界の銀の三分の一を産出したともいわれ、日本の石見銀山と並び称された。

大航海時代、日本から新世界の地を踏んだ侍がいた。その名は支倉常長。伊達政宗の命

を受け、百八十余名の使節を率いて太平洋の波濤を乗り越え、メキシコへ。さらに大西洋を渡り、ローマへと至った。七年に及ぶ航海は、まさに日墨交流そして遣欧使節の先駆けであった。

メキシコシティには使節が宿泊したという屋敷や、七十余名が洗礼を受けたとされる教会が、2025年の今日も静かに佇んでいる。四百年前の旅路に思いを馳せると、幾多の困難を乗り越えた労苦に胸が熱くなる。

グアナフアトは独立革命の火蓋が切られた地でもある。

19世紀初頭、教会の鐘が鳴り響き、イダルゴ神父の「ドローレスの叫び」が民衆を奮い立たせた。その声は全土に広がり、スペイン支配からの解放を求める革命の炎となった。

9月のメキシコは独立を祝う月。街の至るところに緑・白・赤の三色旗がはためく。中央の紋章にはアステカ建国神話に由来する「湖上のサボテンに舞い降り、蛇を啜えた鷺」が描かれている。

テスココ湖上の小島に築かれたアステカの神殿は、征服によって地中に沈められた。かつての聖なる地は、いまメキシコシティのソカロ広場に姿を変えた。黄金の祭壇を抱くメトロポリタン大聖堂、大統領府のある国立宮殿が広場を囲んでいる。古代アステカ文明、中世スペイン文化、そして初の女性大統領を迎えた現代。三つの時代が重なり合い、壮大な歴史の風景を描き出している。十万人を包む広場に立つと、巨大な国旗が、陽の光を受けて着い空に翻っていた。ピバ・メヒコ。